



## 卷三

熊野権現との出会い

五味 熊野は、確か川の場面から始まるのではないね。

富島 大切なのは、一遍が権現ごんげんと出会うところですよ。

五味 その場面(写真1上)から始まる。

富島 その前に一遍は出てくるのですか？

五味 いや、権現との出会いから始まって、ここで山伏が出てきて、本宮ほんぐうに行き、そして川下りで新宮しんぐうに行つて、那智なちの滝で終えるんだ。絵巻の修理などの機会に貼り付けの順番を間違えた。権現の場面から始まるんだよ。

—— 権現との出会いが最初なのですか？

写真1 一遍と熊野権現との出会いから本宮へ

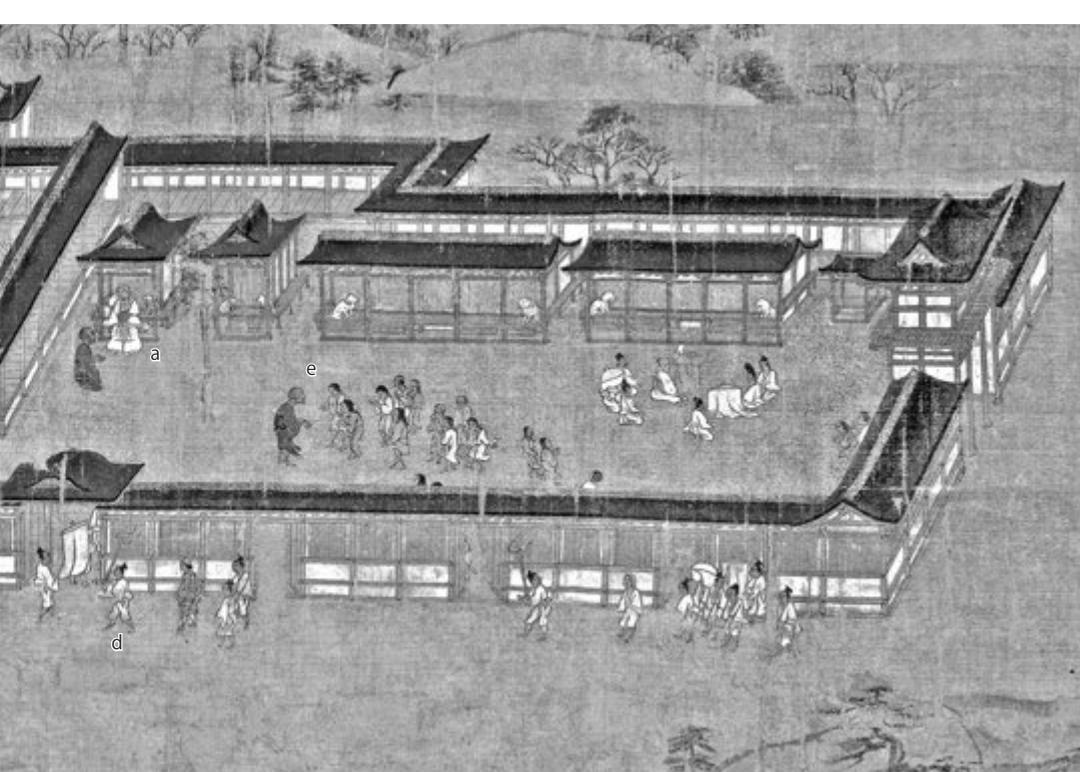


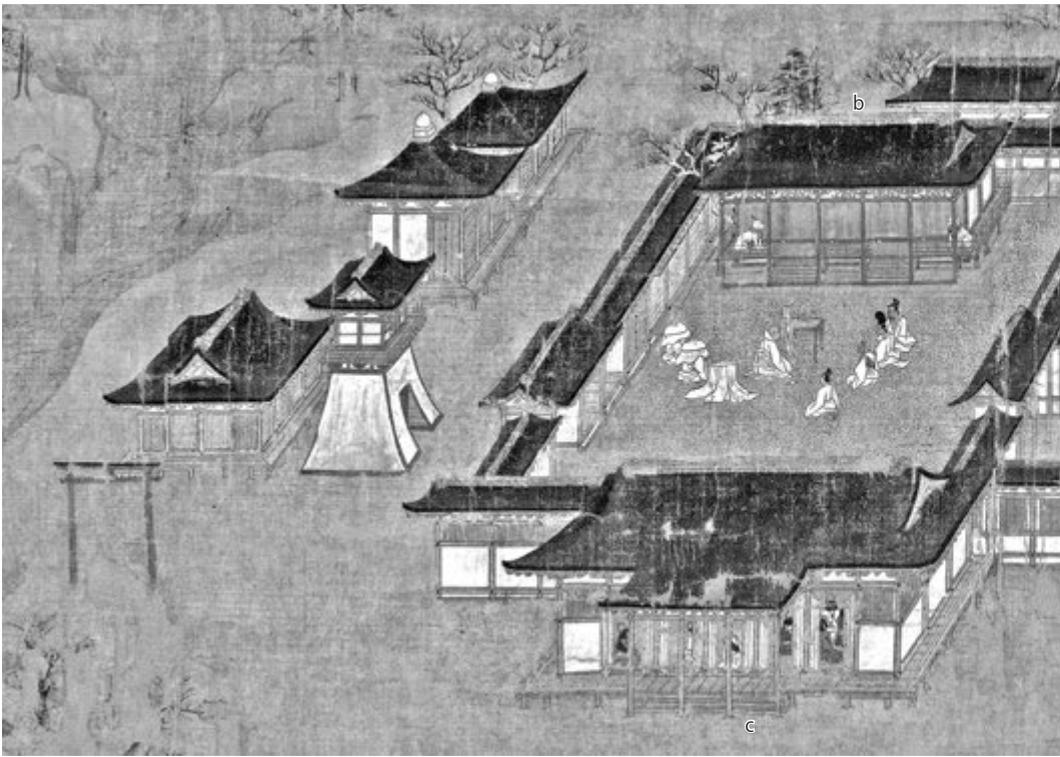
写真2 熊野本宮

五味 そう、最初に熊野権現さんと会って、再び権現様が熊野本宮に現われ、そして川を下って新宮・那智の滝へ行く。

富島 単なる後世のつなぎ間違いですね。

五味 そう、完全につなぎ間違い。熊野本宮は当時は川の  
中州にあつたが、今はこういう感じではない。権現さんの  
後ろの建物が証誠殿(写真2a)で、その左手の立派な建物  
(写真2b)に新宮と那智が祀られている。本宮というけ  
ども、新宮と那智がここに祀られ、在地の神様とあわせて  
三社として祀られた。同じようなものが新宮・那智にもそ  
れぞれ作られた。だから、本宮は、もともとあつたとい  
よりは、ここに重要な神様を集めてできた。奈良の春日神  
社もそうして生まれたと思う。香取・鹿島・枚岡の神が勧  
請されたが、もともからいたのは女神の第四神なのです。す  
なわちもともとは女性の神様が祀られていたところに、男  
の神様が勧請され、さらに若宮が生まれたんですね。

権現が登場する右手の社殿には拝殿がないのに、左手の  
社殿には拝殿(写真2c)があり、後白河院(ごしろかわわ)がここで拝んで  
いると、神体の鏡が輝いた。神体の鏡は何かと言うと、那



智の神でその本地であるのが千手観音せんじゅかんのん。だから後白河院は、自分の願いがかなったと考え、京都に帰ってから蓮華王院れんげおういんを造った。蓮華王とは、千手観音の異名だから、千一体の千手観音が蓮華王院に祀られたわけです。

富島 なるほどね。

五味 今は熊野に行くと、かつての本宮の跡地には建物がなくなっているけれども、礎石が残っていてね。明治の頃に水害でやられた。明治の水害は日本国中で起きている。

—— 松明(写真2d)が描かれています、この場面は夜なのですか？

五味 夜でしょ。

富島 夜ですね。一遍が熊野権現の出でくる夢を見るのです。

五味 夢の中に子どもたちが出てきて(写真2e)、権現の教えに沿って札を配るのね。神社建築としてはどうなの？

富島 定型的な表現というか、熊野社の表現スタイルが出来上がっているとも言われています。

五味 神社建築のかたちが決まってくるのは、だいたい平安末期でしょ。春日神社もそうだし、それからあまり変わ



写真3 熊野権現との出会いの場面

つていない。この場面はおとなしいけれど、印象的だ。

富島 ぼくは権現との出会いの場面(写真3)が好きなので。靈験れいけんにかかわる大切な場面のはずなのに、パッと見たらそれがわからない表現、それがすごくおもしろい。祖師そしが開眼かいがんしたのだったら、もつと奇瑞きずいというか、すごい表現をするのだけど、文字がなければ、パッと見ただけではお坊さん二人が出会っただけという表現でしょう。それが聖絵の中にあるひとつのコンセプトではないかと思つていんです。山伏の姿をした人物が後ろにいますが、それにしてても地味です。

五味 ふつうならクローズアップするよね。

富島 クローズアップして、紫雲が現われるなり何なりして、奇瑞の表現が描かれるのだけど、そうではない。聖絵はリアリティがあるとよく言われるけれども、現代のぼくたちが「そんなことは起こらないでしょ」というような極端なことはあまり描かない。

五味 この場面だけクローズアップさせるために、まわりの山の風景なんか描かないで、雲か霞で隠してしまうのだけど、それもしていいものね。